

〈資料紹介②〉



ローマ聖歌手写譜

ティムソン ジョウナス（資料管理課）

早稲田大学図書館は昨夏、本学名誉教授である森田貞雄先生より、北欧関係の研究書を含む、多数の洋書、貴重資料をご寄贈いただいた。今回はそれらのうちの一つである、ローマ聖歌の写本零葉について紹介する。

○

ローマ聖歌とは、一般的にグレゴリオ聖歌という名前で知られているもので、ローマ・カトリック教会において用いられる典礼音楽であり、ラテン語で歌われ、教会旋法によって律せられた単旋律音楽である。

ローマ聖歌はネウマ譜と呼ばれる記譜法によって書かれている。ネウマ譜といっても、9世紀あたりに使用されていたネウマ譜は、左から右へ、曲線と直線のみで音の流れを単純に記したものであったが、その後、基準となる音程の位置を一本の線で表すようになり、それが発展した結果、およそ13世紀あたりから、今回の譜面のように、4線に四角と菱形の音符を使用した記譜法になった。また、13世紀以後この記譜法は、ヨーロッパ各地共通の譜面となった。なお、譜面のところどころに見られる、やの記号は、音部記号であり、それぞれ、C（ハ）とF（ヘ）の音を表している。つまり、第3線の上にCの記号がある場合、これは曲中の基準となる音程（C音）を第3線に設定する、ということの意味している。この記譜法では、音の高さ（音高）は明確に示されているが、音符の長さ（音価）が不明確であるため、現在いくつかのリズム理論が考えられている。それらは、音符によって音価に違いがあるという考え方と、すべての音符が等しい音価であるという考え方に大別される。後者の歌い方の代表的なものがソレム唱法と呼ばれる、19～20世紀にかけて、フランスのソレムにある聖ペトルス修道院で研究され、体系化されたリズム理論である。なお、このソレム唱法は、現在、絶対的な規範ではなくなっているが、今回においては、資料の紹介ということもあり、あくまで参考として、ネウマ譜をソレム

唱法に基づいて五線譜へ移譜したものを掲載する。

○

今回ご寄贈いただいたローマ聖歌の手写譜は、58×42cmのヴェラム（羊・犢皮紙）を使用したものであり、表裏合わせて4ページ分にわたっている。音符の形状、歌詞の筆跡、花文字や周辺の装飾などから推察して、およそ15世紀中期から16世紀前期にかけて、イタリア北部、現在のオーストリア地方、あるいは南ドイツで書かれたものと思われる。なお、ここに掲載されている聖歌に、IntroitやGrの文字が確認できることから、これはミサのための聖歌ということが分かる（次項を参照）。

○

さて、零葉の見方であるが、譜面の中に‘Introit.’、‘Gr.’、‘V.’、‘Ps.’と（赤）色で記されているのは、それぞれ入祭唱（イントロイトゥスIntroitus）、昇階唱（グラドゥアーレGraduale）、聖句（ヴェルススVersus）、詩篇（プサルムスPsalmus）を意味する。また、零葉の左端にあるローマ数字は、フォリオ番号である。一般的にフォリオ番号は、レクト（表）に付されることが多いが、ヴェルソ（裏）に付される場合も決してないわけではない。フォリオ42のヴェルソと43のレクトが見開きになっているところから、この零葉は羊皮紙6枚で一つのファシクルを構成した冊子の4番目のファシクルの一番内側の零葉であるものと推察される。

零葉を見る限りでは、入祭唱は一つ、昇階唱は二つ確認できる。なお、入祭唱は、ミサの導入で歌われるもの、昇階唱は、福音書の朗読に先立って歌われるものである。

○

ここで各曲の詳細を見ていきたい。まず、それぞれの曲をIndex of Gregorian Chantなどのカタログを活用して、他の資料や校訂譜などと照合すると、これらの聖歌は殉教者ミサのための曲であることが分かる。なお、判明している限りでは、入

祭唱‘Gloria et honore’は、聖バシリデス（6月12日）、聖ゴルゴニウス（9月9日）のミサ、昇階唱‘Beatus vir’は、聖ヴァレンティヌス（2月14日）、聖マタイ（9月14日）のミサにおいて使用される曲である。

入祭唱は、交唱（アンティフォナAntiphona）、詩篇唱、頌栄唱（ドクソロジアDoxologia）、交唱の形式をとる。入祭唱‘Gloria et honore’（表紙写真左、譜例①）においては、歌詞のmanuum tuarumという部分までが交唱、Domine Dominusからuniversa terraまでが詩篇唱となる。ちなみに、この入祭唱においては、第一旋法が使用されており、また、交唱部分の歌詞は詩篇第8篇の第6節、詩篇唱の部分は詩篇第8篇の第1節からとられている。なお、詩篇唱が終わった後に、Gloriaとのみ書かれた部分があるが、これは頌栄唱の歌いだしの部分である。この頌栄唱には幾通りかの旋律があるが、唱者は、この譜面に書かれている歌いだしの部分を見て、どの旋律の頌栄唱を歌うのかを判断する。なお、この譜面に記されている頌栄唱は掲載した譜例（省略された部分は復元して角カッコ内に示した）を参照されたい。

さて、そうすると、この入祭唱‘Gloria et honore’に先立つ聖歌の最後（フォリオ42裏の最上部）にも頌栄唱があることから、この聖歌も入祭唱であることがわかる。この歌詞は交唱の部分はローマ詩篇（通常ヴルガタ聖書に収録されているのは、ガリア詩篇）の詩篇第36篇の第24、26、28節からとられていることがわかり、Justus non conturbabitur...（④、譜例④）という歌詞で始まる入祭唱であることがわかる。また、この曲も第一旋法が使用されており、詩篇唱における歌詞は、詩篇第37章の第1節からとられている。なお、この曲は聖ヘルメス（8月28日）のミサのためのものである。

続いて昇階唱に移るが、昇階唱は応唱という、独唱者と合唱の交互で歌う形式をとる。昇階唱‘Beatus vir’（表紙写真右、譜例②）は第五旋法が使用されており、歌詞は詩篇第111篇の第1～2節からとられている。なお、昇階唱‘Gloria et honore’（③、譜例③）も第五旋法が使用されており、歌詞は、入祭唱‘Gloria et honore’に同じく、詩篇第8篇の第6節からとられている。

○

今回の新収資料については、まだまだ説明すべきことはあるのだが、紙面の制約もあり、大まかではあるが、ここで一旦終えることとする。ミサの式次第を踏まえての具体的な解説などを行うには至らなかったが、今後、機会を見つけて追って紹介していきたい。

なお、音楽も政治や文学、宗教などと同様に歴史を映し出す鏡であるので、今回の零葉のご寄贈をきっかけに、本学での音楽学に対する熱がさらに高まることを期待したい。

（歌詞意訳）

(Justus non conturba)bitur quia dominus firmat
manuum eius tota die miseretur et comodat et
semen eius in benedictione erit in eternum
conservabitur. (Ps) Noli emulari in malignaitibus
neque zelaveris facientes iniquitatem.

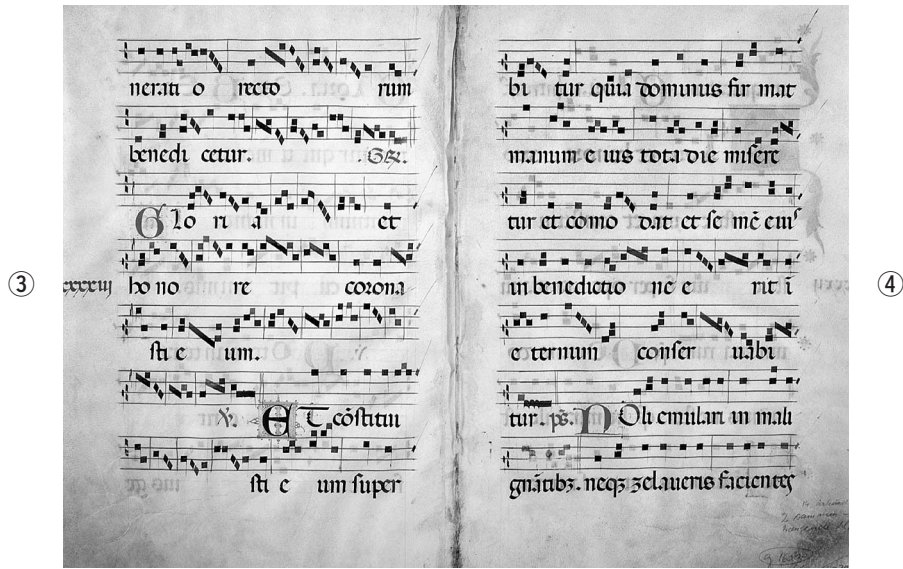
正しい人は、迷うことはないであろう。なぜなら、主がその者の手を取っていて下さるからである。毎日憐んで、貸し与える者は、その子孫が祝福され、永遠に神の守護のうちにあるであろう。(Ps) 悪事でもって人と競ってはならない。また、不正を図る者を嫉んではならない。

Gloria et honore coronasti eum et constituiisti eum
super opera manuum tuarum. (Ps) Domine
Dominus noster quam admirabile est nomen tuum
in universa terra.

栄光と誉れのうちに、(人に)冠を戴かせ、(人)をあなたの御手によって創られたものの上に置いた。(Ps) 主よ、私達の主よ。あなたの御名は、全ての地において賞賛に値します。

Beatus vir qui timet dominum in mandatis eius
cupit nimis. (V) Potens in terra erit semen eius
generatio rectorum benedicetur.

主の戒めにおいて主を畏れ、主を深く愛する者は幸い。(V) 彼らの子孫は、地において力を持ち、正しい者達の世代となるであろう。



譜例① Introitus: Gloria et honore coronasti

8

Glo ri a et ho no re co ro na sti e um

8

et con sti tu i sti e um su per o pe ra ma nu

Ps.

8

um tu a rum Do mi ne do mi nus nos ter quam ad mi ra

Doxologia

8

bi le est no men tu um in u ni ver sa ter ra Glo ri a Pat ri, et Fi

8

li o, et Spi ri tu i Sanc to. Sic - ut e - rat in prin ci pi o, et nunc , et sem -

8

per - , et in sae cu la sae cu lo rum. A - men.

譜例② Graduale: Beatus vir qui timet

Graduale

8

Be a tus vir qui ti met do mi num

8

in man da tis e ius cu pit ni mis.

Versus

8

Po tens in te rra

8

e rit se men e i us ge ne ra ti

8

o rec to rum be ne di ce tur.

8

譜例④ Introitus: Justus non conturbabitur

8

Jus tus non con tur ba bi tur qui a do mi nus fir

8

mat ma num e ius to ta di e mi se re tur et co mo dat et

8

se men eius in be ne dic ti o e rit in e ter nam

Ps.

8

con ser va bi tur. No li e mu la ri in

Doxologia

8

ma li gnan ti bus . ne que zel a ve ris fa ci en tes i ni qui ta tem. Glo ri a

8

Pat ri, et Fi li o, et Spi ri tu i Sanc to. Sic - ut e - rat in prin ci pi o, et nunc , et sem -

8

per - , et in sae cu la sae cu lo rum. A - men.

譜例③ Graduale: Gloria et honore coronasti

8

Glo ri a et ho no

8

re co ro na sti e um.

Versus

28

8

Et con sti ti u sti e um su per...